
竜の翼

黒風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜の翼

【Nコード】

N2348M

【作者名】

黒風

【あらすじ】

魔導士ギルド『FAIRY TAIL』。これはそこで働く魔導士たちの物語である。

始まり

「ここか」

俺は今、とある魔導師ギルド『FAIRY TAIL』の前に立っている。

「すいませーん」

俺はとりあえずあいさつを試してみる。

「ん？何者じゃ？」

一人の老人が怪訝そうに尋ねて来る。

「あなたがマスターマカロフですか？」

「そうじゃがおぬしは何者じゃ？何故ここに？」

「俺の育ての親に言われてここに来ました」

「育ての親？」

「はい」

「誰じゃ？」

「『ランデイル』と言えはわかると」

「！？そうかお前が・・・話は聞いておる。これからよろしく頼む」
「はい」

今日から俺の魔導師としての生活が始まる。

出会い

「ガキ共、話を聞け！」

マスターマカロフが声を張る。

「なんだよじっちゃん」

「じゃますんなって」

今のは上からナツ・ドラグニルとグレイ・フルバスター。このギルドに所属している魔導士だ。ちなみに今喧嘩中。

「ウム。今日からこのギルドに仲間が増えた。ほら、あいさつじゃ」

俺は自己紹介をする。

「始めまして。ファイ・ストームフルといいます。これからここでお世話になります。よろしくお願いします。」

「「「よろしく！」」「」」

凄い歓声で迎えられた。

出会い（後書き）

現在の設定は幼少期です。

戦い

「お前強いのか？」

そう聞いてきたのはナツ。

「わからない。今まで父さんとしか戦ったこと無いから」

「じゃあ俺と勝負だ！」

「待て、先に俺だ！」

グレイが割り込んできた。何故パンツ一丁？

「グレイ、服」

「あー！！」

近くの女の子に注意される。

「私はカナ。よろしくね」「こちらこそよろしく」

「あいさつは後だ。やるぞー！」

ギルドの外。

なんかいきなり戦うことになった。

「手加減しねーからな」

「お手柔らかに」

「それじゃ始め」

何故マスターが合図を？

「おらー！！」

ナツが手に炎を纏って向かって来た。

「火竜の鉄拳！」

俺はその拳をギリギリで避ける。

「旋風脚」

風を纏った足で蹴り飛ばす。
ナツは思い切り吹っ飛んだ。

「ガハッ！？や、やるなあ・・・」

ナツは苦しそうだ。

「こうなったら・・・いくぞ、火竜の咆哮！」

思い切り息を吸い込んで炎を吐き出す。
周りからはやり過ぎとの声も出ている。
炎が迫ってくる。

「嵐竜の咆哮」

俺は口から暴風を吐き出す。暴風は炎を消し去り、ナツを吹き飛ばした。

「「「！！？」」」

周りはただ呆然としている。

「嵐竜・・・だと？」

そういつてナツは氣を失った。

前置き

「お前強いんだな！」

「うん。凄かった！」

ナツとの戦いのあと、俺はグレイとカナと話している。

「そうかな？」

「いくら相手がナツとはいえ、圧倒的だったじゃねえか！」

グレイからの賞賛がハンパじゃない。

「きつとファイなら『あいつら』にも勝てるな」

あいつら？ そう思った時、いきなりドアが開いた。

そこにはナツが立っていた。

「今回は俺の負けだが、次は勝つからな！」

「・・・楽しみにしてるよ・・・」

そのあと、軽い自己紹介が終わった。

「なあファイ。お前もドラゴンに育てられたのか？」

ナツの言葉にグレイとカナも耳を傾ける。

「ああ、そうだ。」俺は答えた。そしてここに来るまでのいきさつを話した。

ドラゴン

「俺は『嵐竜 ランディール』に育てられた」

「俺はイグニールにだ」

俺の言葉に、ナツが続ける。

「知っている。会ったことがあるからな」

「！？本当か！？」

「ああ。」

「それで！？イグニールはどこだ！？」

「わからない」

「なんでだ？」

俺は深呼吸して答える。

「消えたからだ」

「消えたってどこに！？」「わからない。イグニールは、ランディールを迎えに来たと言っていた。どこに行くのか、なぜ行くのかは教えられないと言っていた。その時、俺の息子が『FAIRY TAIL』というギルドにいとイグニールが言っていた。だから俺はランディールに促されて、ここに来た。」

「そう・・・だったのか・・・」

ナツが落ち込んでいる。

「ランディールは俺に『またな』と言い残して行ってしまった。だから、俺はそれを信じて待つ。それまではここで頑張る」

俺はそう言って立ち上がり、

「改めまして、ファイ・ストームフルだ。これからよろしく」

最強と最凶

俺がここにきて、数日が経った。

ここはいつも賑やかで楽しい。

ナツ、グレイ、カナとも大分打ち解けてきた。

今はいつもどりのナツとグレイの喧嘩をカナと二人で見物している。

いつもながらよくやるよなあゝ等と思っていると、

「ただいま帰った。マスターはい・・・ナツ、グレイ。何をしている？」

「エ、エルザ・・・！」

エルザと呼ばれた緋色の髪の少女が入って来た途端、二人の喧嘩が止まった。

凄い！マスターでも止められないのに・・・

「カナ、あの子は？」

「あれはエルザ。このギルドで『最強』の女だよ」

なるほど。なかなか強烈な睨みだもんな。

「？君は誰だ？」

エルザが俺に話しかけてきた。

「あ、ああ俺はファイ。ファイ・ストームフルだ。先日このギルドに入った。これからよろしくな」

「そうか。私はエルザ・スカーレットだ。よろしく頼む」

そうこうしているうちに、ナツとグレイの喧嘩が再開された。

「やめんか二人共！」

二人にエルザの拳が炸裂する。

やるな・・・エルザ。

その時、入り口からまた違う声がした。

「エルザー！この前の続きするぞ！」

「ミラか・・・よし、かかってこい！」

エルザと、今入ってきたミラと呼ばれた少女が戦い始めた。

「もうお姉ちゃんつたら・・・帰ってきたばかりなのに・・・」

「ほんとにもう・・・」

ミラ？と一緒に帰ってきた少年と少女が呆れている。

「お帰り、リサーナ、エルフマン。」

隣のカナが二人に話し掛ける。

「ただいまカナ・・・？その人は？」

「俺は・・・」

エルザのときと同じように自己紹介をする。

「私はリサーナ。よろしくね」

「僕はエルフマンだよ」

「それで、今戦ってるのはミラ姉ちゃん」

二人の戦いを指差して言う。

カナ曰く、『最凶』の女だとか・・・納得。

「あいつら・・・特にエルザ。あれでよく俺達に言えるよな」

「本当だぜ・・・なあファイ。あいつらぶっ飛ばしてくれねえか？」

그레이が俺に言う。

「もしかして、この間言ってた『あいつら』って・・・」

「そうだ、頼む！お前なら余裕だろ？」 그레이が言った瞬間、物凄い殺気が飛んできた。

「 그레이・・・聞き捨てならんな・・・」

「私らが負けるって？なめんじゃないわよ！-」

그레이のせいで俺が怒られてる。

そしてそのまま二人と戦うことに・・・

1VS2

なぜかエルザとミラと戦うことになった俺。
ギルドのみんなが気の毒そうな目で見ている。
はぁ……

「始めるぞ」

「覚悟しな」

エルザは換装して黒羽の鎧を身に纏い、ミラはサタンソウルで俺に迫ってくる。

「障風壁」

俺は風の盾を作り出す。

二人は風に押し戻される。それでもエルザは剣で、ミラは爪で風を切り裂き、向かってくる。

「風纏斬手」

両手に風を纏って刃状にして二人の攻撃を止める。
そして風の刃を二人の喉元に突き付ける。

「はい、おしまい」

俺は風を消して、ギルドへと戻る。

「待てっ！もう一度戦え！」

エルザは負けを認めたみたいだが、ミラは諦めていないようだ。

「あー・・・また今度な？」

そう笑いかけると、ミラは赤くなった。

「なっ／＼／ふ、ふざけんな!!」

そう言っているうちに、俺は帰った。

卵

あれから三ヶ月が経った。いろんな人に会った。

まずはラクサス。

あいつと会ったとき、まず第一声が「俺と戦え」だった。

とりあえず戦ってみたら、難無く勝った。それからというもの、毎日のように勝負を挑んで来る。あまりにもしつこいから一度半殺しにしたら、ラクサスはビビって近寄って来なくなった。マスター曰く、ラクサスが人に怯えたのは初めてだという。

それから、ミストガンとギルダーツ。

ギルダーツはふざけたオッサンだが、このギルドで俺より強い人間のひとりだ。安請け合いで戦ったら、見事に負けてしまった。

ミストガンは何度かギルドには来たのだが毎回眠らされてしまうので、まだ一度しかちゃんと会っていない。かなり無愛想な人だった。

他のみんなとも円満だ。

歳が近いナツ達とは、特に仲がいい。

そして俺と話す時、なぜかカナとミラは顔が赤い。風邪かと思ってグレイに氷を頼んだら「鈍感・・・」と言われた。何のこと？

そして今俺は、町外れの森でナツに滅竜魔法を教えている。属性は違うが、原理は一緒なので問題は無い。

「火竜の翼撃！」

ナツが木に向かって技を放った時、その木から大きな卵が二つ落ちてきた。

「なんだこれ？」

「わからない。とりあえず持ち帰ってみるか」

「おう、お帰り・・・って何持ってたんだ？」

「森で卵が落ちてたんだ」「でかしたナツ！みんなで食おうってか？」

「いやだ！これはドラゴンの卵だ！絶対孵すんだ！」「ドラゴン！？本当なのか？」

「いや、わからない。ナツが勝手に言っているだけだ」

「だって、この辺の模様が竜も爪みたいだぜ」

「いや、無理がある・・・」

「とにかくじつちゃん！この卵孵してくれよ！」

「馬ッ鹿モン！命を冒流するでない。命は「愛」から生まれるもんじゃ！孵したければ、愛情を注ぐことじゃ」

「愛情を注ぐ？」

「マスター。ナツにはまだ難しいだろう」

「そうじゃな」

「と、とにかく、大事に育てればいいんだろ？」

「ナツ、私も一緒にいい？」

「いいぞ、リサーナ」

ナツとリサーナは二人でどこかへ行った。

「じゃあ俺はどうしようかな・・・」

「私が手伝ってあげるー」「なっ、カナずるいぞ。私も「ミラ、お前は仕事があるだろう」っ、くう・・・」

エルザの言葉に、ミラはかなり落ち込んでいる。

（そんなに卵が育てたいのか？）

そんなことを思いながら、俺は力ナと卵を育て始めた。

“ 幸せ ” と “ 幸運 ”

俺とカナは森の中で卵を育てることにした。
見つかったところで育てた方がいいというカナの判断だ。

「早く生まれないかなあ」「そんなすぐには、生まれないだろう」

などと他愛ない会話をしていた。
その時、

「グワアアアア！！！！」

「！！！？今の何？」

「わからない。ちょっと見てくるからここに・・・」
「ファ、ファ
イ！後ろ！」

振り向くとそこには大型モンスターが。

「ラ、ラクリマジロだと！？」

そのモンスターはラクリマジロだった。

ラクリマジロは体を丸めて、襲い掛かってきた。

「くっ、障風壁」

風の盾を出す、受けきれずに弾き飛ばされる。

「ファイ！」

「大丈夫だからそこにいろ！」

そういつて再び対峙する。ラクリマジロが再び向かってきた。

「嵐纏斬手」

手に暴風の刃を纏って切り掛かる。そして、相手の勢いを殺したところだ

「嵐竜の咆哮！」

ラクリマジロは暴風を受けて、倒れた。これで一安心。そう思っている

「ファイ、早く！卵が・・・」

カナに呼ばれて戻ると、卵が奮え、ヒビが入った。そしてそこから生まれたのは・・・

「・・・猫？」

全身真っ黄色の猫だった。

「ふぁー・・・ん？誰？」「しゃ、喋った！？」
なんと猫が喋ったのだ。

「お前・・・喋れるのか」「うん。で、誰？」

「俺はファイ」

「私はカナだよ。あなたは？」

「生まれたばかりだもん、名前なんて無いよ」

「そりゃそつか。うーん・・・ギルドに戻るまでに決めるか」

「ギルド？」

「ああ。俺達の家族がいるところだ。早く行くぞ」

ギルドの前まで行くと、何やら歓声が上

がっている。「やったー！ドラゴンが生まれたー！」

「いや、猫でしょ？」

「あい！」

「凄いね。みんな笑顔だよ！」

「ああ。よし、お前は今日からハッピーだ！」

「あい！」

「楽しそうどこだね」

「ああ。今日はいつもより楽しそうだな、お前は運がいい。・・・
そうだ」

俺は閃いた。

「お前の名前はラッキーだ！」

「いい名前だね」

「はいです」

二人とも賛成してくれた。

「これからよろしくな、ラッキー」

「はいです！」

“ 幸せ ” と “ 幸運 ” （後書き）

次からは時間が飛びます。

設定

名前：ファイ・ストームフル

幼少期に森をさ迷っているところを、嵐竜『ランディール』に拾われる。

ランディールのもとで育ち、嵐の滅竜魔法を扱う滅竜魔導士となる。ある日、ランディールはファイのもとを去った。その時に、『FAIRY TAIL』に行けと言いつた通り、ランディールの言った通りに『FAIRY TAIL』に行き、そこで生活をしている。

年齢はエルザやミラと同じ年。

性格はめんどくさがりやで、仲間想い。誰にでも優しいが、キレると手がつけられない。

滅竜魔導士なので、自分と同じ属性のものを食べて自らを強化できるが、「風」ではなく、嵐のような「暴風」でなければ効果は得られない。

ギルドのマークは左手の甲にある。

色は緑。

巷では「切り裂く翼スラッシュウイング」という通り名で呼ばれている。

ちなみに、結構なイケメンで、ファンだけでギルドが二つ三つ作れるとも言われている。

ルーシィ（前書き）

本編に入ります。

ルーシィ

S i d e ルーシィ

ヤッホー！みんな。私ルーシィ！

一応、魔導士です。

ギルドには入ってないケドネ。

私は今、アコガレのギルド、『FAIRY TAIL』を目指します。

その途中、『^{チャーム}魅了』っていう魔法に騙されそうになったところをある人に助けられて、今その人にお礼に昼食をおごってるんだけど・

「いやゝ悪いな。メシなんかおごってもらって」

「あい！」

「い、いえ・・・お気になさらず・・・」

食べ過ぎ！そしてはねすぎ！

あつ、今のはさっき助けてくれた人で、名前はナツ。それと、なぜか喋る猫のハッピー。にしても、よく食べるわねえ・・・

「にしてもお前、こんなとこで何してんだ？」

「え？あ、私一応魔導士なんだ。だからギルドに入ろうと思って・
・あつ、そうだ。『FAIRY TAIL』って知ってる？スッゴ
い魔導士がたくさんいて有名なんだ。私もそこに入りたいんだけど、
やっぱ入る条件とか厳しいのかな？」

「「ガツ、ガツ」」

き、聞いてないし・・・

「ま、まあ私はそろそろ行くね。じゃあごゆっくり」

ナツ達と別れてから少しして、またあの男に会った。

「おや、君はさっきの・・・」

「あ！アンタはさっきの・・・あんな卑怯な魔法で女の子達を騙すなんて信じられない！」

「まあそんなことは置いておいて、僕とパーティーにでも行かないかい？」

「誰があんたなんかと！どいてよ！私は『FAIRY TAIL』に行きたいんだから！」「ん？なんだ『FAIRY TAIL』に入りたいのかね？それならば丁度いい。この僕が歓迎しようじゃないか！」「え！？アナタ『FAIRY TAIL』の魔導士なの！？」^{サラムンダー}「『火竜』って聞いたことないかい？」

「えっ、あのお店じゃ買えない火の魔法を操るっていう・・・」

「そうだよ。だから君もパーティーに来るといい。僕の仲間も歓迎してくれるよ」

「じゃ、じゃあお言葉に甘えて」

「ふっ、ちよろいもんだな・・・」

ルーシィ（後書き）

最初はルーシィサイドで始まります。

それと、原作は知っていても完全には覚えていないので、ところどころオリジナルでいきたいと思います。
のちのちオリキャラなども出てきます。

ナツ

S i d e ルーシィ

私は今、ボラさん主催の船上パーティーに来ています。

「やあ。楽しんでくれてるかな？」

「はい。あの、これが終わったら、本当に『FAIRY TAIL』に入れてくれるんですね！？」

「ああ、もちろんだ。僕が保障しよう」

「よかった……」

数十分後。

私が船を歩いている時。

「今回も上出来だな」

「ああ、そうだな。しかし楽な仕事だよな。女共をパーティーに招待して、そのまま売りさばくなんて」

えっ！？どういうこと？

と、とりあえずボラさんに聞かなきゃ！

「ボラさん！」

「ん？どうかしたのかね？」

「さっき聞いたんですけど、このまま人身売買に行くって……」

「！？そうか、聞かれてしまったか……。ならば仕方ない。お前た

ち、この女を閉じ込めておけ」

「はっ！」

「えっ？ちょ、ちょっとボラさん！！どういふことですか！？」

「どうもこうも、君がさっき言った通りだよ。人身売買の会場に着くまで、少し大人しくしててもらおう」

そんな・・・！せっかくアコガレの妖精の尻尾に入れると思ったのに・・・

バコォーン！！！！

「！！？な、何だ！！？」

いきなり天井に穴が空いた。

そこから誰が入って来た。

「ナ、ナツ！？」

「なんだね君は？」

「妖精の尻尾の魔導士ってのはどこのどいつだ？」

「なんだ・・・俺達に何か用か？」

カツ、カツ・・・

ガシッ！

「俺は妖精の尻尾のナツだ。お前何か知らねえぞ！」 「何！？本物だと！！！」

あっ、本当だ！あのマーク・・・

「ちっ、お前たち、やってしまえ！」

「「「ウォー！！！！」」「「まとめてかかってきやが・・・オエー・・・！」」

「ナ、ナツ！？」

「ナツは乗り物に弱いんだよ」

あ、ハッピー・・・何で羽生えてんの！？

「ハッピーそのは「今のうちだ！やっちまえ！」ちょ、ナツ！」
「ぐはっ！」

ナツが危ない！よし、こうなったら・・・

「開け、宝瓶宮の扉。アクエリアス！」

私は鍵を使って星霊を呼び出した。

「アクエリアス、この船を港までもどして！」

「ちっ」

「ちよつとお！今「ちっ」って言ったかしらあ！！」「いちいちうるさい。そんなんだから彼氏が出来ないんだ」

「ちよつとお！今は関係ないでしょ！！早くして！」「ちっ、オラアアア！！」

アクエリアスが水を操って船を動かす。だけど・・・

「ちよつと！？私たちまで巻き込まないでよ！」

「不覚・・・船まで流してしまった・・・」

「私たちを狙ったのぉ！？」

「うるさい。これから彼氏と旅行だ一週間は呼ぶな。彼氏と、な」
「二回言っとな！！」

アクエリアスは帰って行った。

「痛た・・・よくもやってくれたな・・・喰らえ、プロミネンス・ウィップ!」「ナツ!?!」

ナツが紫の炎に包まれた。

「ボラ・・・『プロミネンスのボラ。』四年前、巨人の鼻^{タイタンノーズ}を追放された魔導士だね」

ハッピーが冷静に言う。

「ちよつと!?!そんな悠長のこと言ってる場合じゃないでしょ!!
ナツが・・・」

「大丈夫。ナツに炎は効かない」
「えっ?」

どうということ?と思つてナツを見ると・・・

「炎を食べてる!?!」

「・・・竜の肺は焰を吐き、竜の鱗は焰を纏う・・・これは自らの体を竜へと変換させる古代魔法。ナツは滅竜魔法の使い手だよ。」
「・・・喰つたら力が沸いてきた・・・いくぞ」

ナツは大きく息を吸い込んだ。

「火竜の咆哮!」

そして口から勢いよく炎を吹いた。その姿はまるで、
^{サラマンダー}
「火竜・・・」

凄い!凄いんだけど・・・

「やり過ぎよー!!」

港は全壊・・・とまではいかないけど、ほぼ半壊している。

「!?!マズイ!逃げるぞ!」

わぁー・・・凄い大事だなぁ・・・

「ってか何で私まで!?!」「?だって妖精の尻尾に入りたいんだろ?だったらついて来いよ!」

「あい!」

「えっ?・・・うん!!」

妖精たち

S i d e ルーシィ

私は今、念願の『妖精の尻尾』の入り口にいる。

「本当に来たんだ・・・」 「あつたりまえだろ！？さあ、中に入るうぜ」

「あい」

妖精の尻尾内

「たっだいまー！」

「オウ、ナツ、おかえ」 つ テメエ！イグニールの情報、嘘だったじやねえか！」 ブヘツ！！？」

そんないきなり殴りかからなくても・・・ってか大丈夫かしら。机とか壊れてるケド・・・

「おつナツ！帰ってたのか。よし、この間の続きするぞ！」

「グレイか・・・上等だ、かかってこい！」

いきなり喧嘩始めてるし・・・というより何でパンツ一丁！？

「お前等、何をしている」

あ、何か学ランの人が止めに入るみたい。

「漢なら拳で語らんかあ！！！！」

結局喧嘩あ！！！？？

「「邪魔だあ！！」」

「グア！！」

弱っ！！！！

いかにも強そうなのに・・・

「全くもう、うるさいわね。ったく、落ち着いて酒も飲めやしない」

「本当、うるさくて困っちゃうねえ」

酒を樽で飲んでいる女性と、女性を数人連れている男が言った。

・・・本当みんなぶっ飛んでるなあ・・・

「まったくもう、しょうがないわねえ・・・ところであなたは？」

誰かが話し掛けてきた。ってこの人、グラビアで有名なミラジエーン！！？凄い、こんな人に会えるなんて・・・

「ミラ、ただいま」

「おかえりなさい、ハッピー。あなたは？」

「あ、はい。ルーシイといいます！妖精の尻尾に入りたくて来ました！」

「あら、そう。ようこそ妖精の尻尾へ。あいにく今はこんなだけだね」

「いつもこうなんですか？」

「まだまだ序の口よ。まだそこまで激しくは・・・あ、始まるみたいね」

辺りには魔法陣が展開している。

「ま、魔法！？ミ、ミラさん。危なくないですか！？」

「大丈夫。すぐ終わると思・・・」

ドゴッ！！

「ミ、ミラさん！！？」

何かの破片がぶつかってミラさんが倒れた。

頭から流血してるし・・・

っていうかこれじゃギルドがもたないんじゃない・・・

「何か凄いことになってるね」

「ああ。いつものことだが、このままじゃギルドが崩れそうだしな・・・」

何やら外から男と女の話し声が聞こえた。

「兄さん、どうするの？」「とりあえず止める」

そう言って男のほうは手をかざし、

「抑風」

と唱えた。すると、

「グハッ！」

「ウオ！」

「ウツ！」

つと、みんなが床にはいつくばりだした。

「あれだけの人数をいとも簡単に・・・」

「いったい何者！！？」

ファイ（前書き）

すみません。遅くなりました。

ファイ

「久しぶりだな・・・」

「最近忙しかったからね」「はいです」

俺は二ヶ月ぶりにギルドに帰ってきた。

ちなみに一緒に居るのはラッキーと妹分のソラだ。

「とりあえず、中に入るか」

「兄さん、なんだか騒がしくくないですか？」

「ああ。どうせいつもみたいにナツたちが暴れてんだろ？」

ソラとラッキーは納得する。

「つても、このままじゃギルドがもたないしな・・・」

俺は考える。

「どうするんですか、兄さん」

「とりあえず止める」

俺はギルド内部に手をかざし、

「抑風」

と唱えた。

するとみんなは床にはいつくばった。

少ししてから俺は技を解いた。

「お前ら、暴れるのはいいが、ほどほどにしておけ。ここが潰れたらどうすんだ？」

「ファイ！？帰ってきたのか！？」

「だからここに居るんだが・・・」

グレイの質問にそう返す。

「ファイ！」

「よう、カナ。久しぶりだな」

カナがこっちに走ってきた。

「ファイ・・・グペツ！」

俺に飛びついてきたカナを、ソラが蹴り飛ばした。

「痛った・・・ちょっとソラ、何すんのよ！」

「それはこっちのセリフです。気安く兄さんに触れないで下さい！」

「・・・」

カナとソラ、一触即発の危機。

「ったく・・・お前ら、喧嘩すんなよ・・・」

俺はそういつて二人の頭に手を置く。

「
」

「!・・・／／／」

ソラは喜んで、カナは顔を赤くしている。

「カナ、大丈夫か？顔、赤いぞ」

「えっ！い、いや、何でもない／／／」

「いいなあ・・・」

ミラが嫉妬して、物欲しそうな目で見ている。

「ミ、ミラさん？あの人は・・・」

ミラの隣にいる女性がミラに何かを聞いている。

「えっ！あ、彼はファイ。ギルド内で一、二を争う実力者よ。『切
スラッシュウイング
り裂く翼』って言ったほうがわかりやすいかしら？」

「えー！！あの人が、あの有名な・・・」

俺はミラたちの所へと行く。

「そんな有名じゃねえよ。それよりもミラ、彼女は？」

「あ、はい！あの、私ルーシイって言います！このギルドに入りたい
くて、ここまで来ました！」

「そうか。俺はファイだ。よろしくな、ルーシイ」

俺はそう言つて、微笑みながら手を差し出す。

「っ！！あ、はい・・・／／／」

その瞬間、ルーシイの顔が赤くなった。熱でもあんのかな？

S i d e ルーシイ

「そうか。俺はファイだ。よろしくな、ルーシイ」

そう言つてファイさんは手を差し出してきた。

「っ！！あ、はい・・・／／／」

その時の微笑んだ顔に、思わずドキツとしてしまった。顔が赤くなっているのが、よくわかる。

しかも、周囲の視線がかなり痛い。隣にいるミラさんとか、殺気が尋常じゃない。

ファイさん、人気あるんだな・・・

S i d e o u t

「つつても、ギルド加入とかは、マスターに聞かねえと・・・」

とかなんとか言つてると・・・

「ガキども、静かにせんかあ！！」

マスターが丁度良く現れる。

「まゝた評議員から苦情が来とるぞ・・・」

そう言つてマスターは資料の束を読み上げる。

「グレイ！まゝた街の中を裸で歩きおつて！しかも今回は下着泥棒の苦情まで来とるぞ！」

「グレイ・・・」

「いや、だつて裸はまずいだろ？」

「まず脱ぐな」

「・・・はい」

「次にカナ！酒を樽で十三個も呑み、しかもその分の請求先は評議員！」

「ばれたか・・・」

「カナ、呑むのもほどにしておけ」

「う、うん・・・／＼／」

「エルフマン！要人の警護中に要人を殴るなど言語道断じゃ！」

「い、いや、だつて、『漢は学歴』なんていうもんだから・・・」

「んなもん、聞き流しておけ」

「オ、オウ！」

「ロキ！主に女性問題で、数々の芸能事務所等から損害賠償請求が来とる！更には評議員のレイジ老師の孫娘にまで手を出しおつて！」

「しょうがないよ。みんなが可愛いながイケナイんだから」

「その女癖はどうにかしろ」

「・・・はい・・・」

「ナツ！」

「オウ！」

「『オウ！』じゃないわい！！ハルジオンの港の半壊、そのほかにも街を二つ半壊！やりすぎじゃ！！」

「仕方ねえだろ！アツい戦いだっただから」

「ソラ！お前のせいで山火事がおきて、山が二つ全焼じゃあ！！」

「もう一ついけると思ったんだけどなあ」

「馬鹿なことを言うな！！・・・最後にファイ！」

「ん？」

「海のと真ん中での戦いの影響で津波が起き、半径五？いないの街がすべて倒壊したぞ！！」

「いや、それは不可抗力だろ？」

「黙れ！毎度毎度怒られるワシの身にもなってみろ・・・！じゃが・・・」

手に持った書類を燃やし、

「評議員など、クソ喰らえじゃ！！！」

「魔法とは、つねに自由な発送の元で生まれ、進化してきた。ガキども！つまらんルールや法に縛られるな！己のルールと仲間を信じる！」

「」「」「ウォー！！！！」「」「」

「す、凄い・・・」

「ああ。ウチのマスターは、他とは格が違う」

「ん？お又シ、何者じゃ？」

「え？あ、はい、ルーシイと言います！・・・あの、私を妖精の尻尾に入れてください！！」

「ん、いいぞ」

「早っ！！」

「まあ、こういう人なんだ・・・とにかく、これからよろしくな、ルーシイ」

「はい！！」

ファイ（後書き）

ソラについては後々プロフィールを載せます。

ストーリーがまとまんないので、更新、遅くなりそうです・・・

だがしかし！メゲズにガンバリマス

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2348m/>

竜の翼

2010年10月17日03時46分発行